

事業概要	<ul style="list-style-type: none"><li>東京おもちゃ美術館運営事業</li><li>ウッドスタート事業</li><li>姉妹おもちゃ美術館設立事業</li><li>全国巡回型移動おもちゃ美術館(木育キャラバン)事業 など</li></ul>
部署	木育推進事業部
所在地	〒160-0004 東京都新宿区四谷4-20-1
連絡先	(電話番号)03-5367-9601 (E-mail)t.hashizaka@art-play.or.jp
環境省ローカルSDGsを通じて、実現したい社会像	日常のくらしと森をつなぐ重要なツールの一つである「木のおもちゃ」と「木の空間」を活用して、地域の森や山などの自然に思いを馳せ、環境を守ることの大切さを学び、木を使うことの大切さを知り、持続可能な社会を構築していくことが目標である。「木育」によって培われた感性や体験が、循環型社会の実現において、心の中の軸となり、すべてのいのちが尊重される社会の実現へと繋がることを目指している。
ローカルSDGsの実現に貢献できるソリューション	<b>分野</b> 観光ビジネス／農林水産業・地場産品／健康・福祉 東京おもちゃ美術館が全国で進めている「ウッドスタート」は、その地域で生まれた赤ちゃんに、地産地消の木製玩具を誕生祝い品としてプレゼントする事業であり、子どもをはじめとする全ての人たちが、木の温もりを感じながら、楽しく豊かに暮らすことができるようにしていく取り組みである。その他、全国に姉妹おもちゃ美術館を設立したり、木のおもちゃで楽しむイベント「木育キャラバン」を巡回したりしている。 これらの取り組みは、①全国各地の森林資源を活用して地方創生に結びつけること②様々なステークホルダーが参画することで環境保全に結びつけていくこと③子育て支援の一環として暮らしを豊かにしていくこと、この3つを目指している。
	<b>URL</b> <a href="https://www.mokuikulabo.com/">https://www.mokuikulabo.com/</a>
上記ソリューションを提供できる地域について	全国

## 自者の特徴

## ①【ウッドスタート】

当法人の事業の一つ「木育」の具体的な行動プランである「ウッドスタート」(商標登録済)は、全国で49自治体、20園、28企業が共鳴し、宣言している。

自治体の「ウッドスタート宣言」の条件は、そこで生まれた赤ちゃんに、誕生祝い品として、その地域の材を使って、その地域の職人がつくった木のおもちゃをプレゼントすることである。また木や森のない都市部の自治体の場合には、森林のある姉妹都市の材でおもちゃを制作できるようにマッチングする。

東京おもちゃ美術館が関わることで、クオリティの高い木製玩具が作れるだけでなく、安全性の担保、全国への普及、メッセージ性をもったおもちゃの開発が行われる。もちろんこの活動を通して、地域の森への関心を高めるだけでなく、林業、林産業の活性化、川上と川下のネットワークづくりなどにも貢献できる。



## 自者の特徴

## ②【姉妹おもちゃ美術館】

おもちゃと遊びの文化を全国に広めるため、地域ならではの自然と文化の魅力あふれる「姉妹おもちゃ美術館」を、東京おもちゃ美術館監修のもと全国に設立している。現在、沖縄県国頭村、秋田県由利本荘市、山口県長門市、岩手県花巻市でオープンし、数年以内に、12館となる予定。

すべての姉妹おもちゃ美術館においては、地域材を徹底的に活用しており、床や壁などの内装はもちろん、遊具やおもちゃにも地域材を使用している。また観光施設としても機能しており、設立後には地域外からもかなりの観光客が訪れている。さらには、これらのおもちゃ美術館の運営は、地元NPO等が担っており、必ず住民を巻き込んでのボランティア組織をつくるので、住民のまちづくりへの参画という点でも効果的である。こうした姉妹館設立事業を通して、様々な地域課題に取り組むことが可能となる。

例えば、秋田県由利本荘市の「鳥海山木のおもちゃ美術館」は、歴史ある廃校を利用して美術館にし、廃線となった電車を「おもちゃ列車」に変身させ、初年度は、全国各地から10万人以上の来館者数となった。日本各地で課題となっている「廃校活用」「地方鉄道の赤字軽減」「住民のまちづくりへの参画」「関係人口の増加」などに役に立っている。



## 自者の特徴

## ③【木育キャラバン】

魅力ある地域資源や自然、そして森林を見つめ直し、地域活性化に繋がるきっかけ作りの役割を担っているのが木育キャラバン(移動おもちゃ美術館)である。国産材を中心とした温もり溢れる良質な木のおもちゃ300点以上で遊ぶことができ、五感をフルに活用した木育体験が可能である。また地域の木育関係団体とは積極的に連携することで、その地域ならではの木や森の特徴を伝える場となっている。さらには設営準備から開催、撤収までを地域の方々と共に作り上げることで、多くの方々を巻き込んで開催するイベントでもある。



このように、地域材のみならず、地域にあるさまざまな「資源」を活かして、地域とともに作り上げるのがこれらの事業の特徴である。このことで林業・林産業を中心とした地域経済の活性化だけでなく、観光客の入り込み、さらには新たな産業や雇用を生み、住民のまちづくりへの参画のみならず、他地域とのつながりによる関係人口の増加をもたらしている。また、森に関心がなかった人が、関心を持つようになるきっかけづくりにもなる。

SDGs経営に向けた自  
者の課題や悩み

地域の林業・林産業の活性化、地域材需要拡大のきっかけとなる「ウッドスタート」だが、「宣言後」にさらにその意義を継続、発展させていくためには、木や森に興味がない人にも、地域の課題解決の一つとしての“木育”という活動について理解をしてもらい、環境意識向上へと結びつけていかなければならない。そこはそう簡単ではないが、資源を循環させ、森林環境の健全化とともに地域活性化へ繋がる事業へと発展させるために、「木のおもちゃ」「木の空間」といったツールを存分に活用しながら、地域のニーズに合った木育推進事業を、自治体や住民と協働して行うことで、実現していきたい。

特に森のない都市住民にとっては、遠く離れた森と自分たちの暮らしとのつながりは見えにくい。しかしその関係性を知ることは、SDGs実現のためにも必要不可欠であり、「伐って、使って、植える」ことへの理解を深めることが重要である。

今後は森林を抱える自治体と森のない地域が、単なる「資源供給地」と「木材消費地」としての関係性だけでなく、「木を使う」ことを通して「森を守る」という意識のもと、「対等な関係性」を築くために、「木を使うことの意味の普及啓発」が必要不可欠である。

そのためにも今後は森林環境譲与税を、木育活動の財源として有効活用していきながら、さらなるSDGsにつながる木育の推進をおこなっていききたい。

ローカルSDGsの実現  
に貢献できるソリュー  
ション

## 事例①【ウッズスタート】

すでに50近い自治体がウッズスタート宣言を行って、地域材を活用した誕生祝品の贈呈を行っている。その中でも、本事業の趣旨をふまえ、特に効果的なのは、森林のない都市部と豊かな森林を保有している地域が、連携している事例である。もちろん出生数が多いということに伴う地域材需要拡大という効果もあるが、それ以上に、都市地域住民への森や環境への意識醸成という観点から、SDGsの実現に貢献していると考えられる。以下に2つの事例を紹介する。

まず新宿区と伊那市の事例である。伊那市は、旧高遠藩主内藤家の江戸屋敷が今の新宿御苑にあったことの縁で、新宿区と友好提携を結んでいる（伊那市、高遠町、長谷村が合併して、現伊那市となっている）。新宿区は、カーボンオフセットの事業のひとつとして、もともとかなりの予算をかけて、伊那市に「新宿の森」を整備してきた。そこで、伊那市の森の材で、伊那市の職人が作ったおもちゃを、新宿区の赤ちゃんに配るというしくみを作った。新宿区は年間2500人近くの赤ちゃんが生まれている。そのことで、かなりの量の伊那材が消費され、伊那市の職人への経済効果が期待されるだけでなく、誕生祝品を通して、多くの新宿区民に、伊那市とのつながり、また木を使うこと、そして暮らしに木を取り入れることの意義や、自然環境への興味関心を喚起する有効な手段のひとつとなっている。

事例の二つめは、豊島区と秩父市の事例である。豊島区でも誕生祝品が配られているが、そのうちの木製玩具については、秩父材を活用している。また昨年10月、豊島区内にオープンした子育てサロン「パパママ☆すぽっと」は、東京おもちゃ美術館監修によってつくられ、そこにも多くの秩父材が使われている。このことを通して、森や木に関心をもってもらうとともに、秩父市は豊島区民にとっての大切な水源地のひとつでもあることを伝え、木を使うことが、豊かな森を守ることにつながるということを知るきっかけにもなっている。

## ローカルSDGsの実現に貢献できるソリューション

**事例②【姉妹おもちゃ美術館】**

2020年7月に、4館目の姉妹館となる「花巻おもちゃ美術館」が、宮崎賢治の故郷でもある岩手県花巻市にオープンした。地元の人に惜しまれつつ閉店した百貨店「マルカンビル」の2Fに、民間企業である地元の木材会社が主導しつくられた。

館内の内装、家具やおもちゃの大半には、岩手県産材が使われ、県内の職人が制作を担当、完成させた。そもそも岩手県は、広葉樹の森が数多く残っており、この美術館は、森の多様性、木の持っている可能性を、楽しみながら伝える場となっている。

まだオープンしたばかりではあるが、連日多くの親子連れが訪れている。特にこの夏休みは、コロナウイルスへの感染防止に細心の注意を払いつつ、花巻市以外の県内外からも多くの人が入館している。

同じように地域材を活用してつくられた「やんばる森のおもちゃ美術館」「長門おもちゃ美術館」「鳥海山木のおもちゃ美術館」においても、同様のことが言えるのだが、まずはこの閉店した百貨店に、数多くの人を訪れるようになったことは、地域の活性化につながり、住み続けられるまちづくりに貢献したと言える。その中で、木育の活動として、木や森のことを伝えることで、環境への意識の醸成にもつながっている。また住民の「出番」としても一翼を担っている。

**事例③【木育キャラバン】**

毎年、全国各地50カ所のべ14万人以上が来場する木育キャラバンでは、参加者に木育の意義を楽しく伝えることができるとともに、暮らしに木を取り入れるきっかけにもなっている。

また参加者の反応、イベント後の波及効果を踏まえ、さらに地域材活用を進める活動として、自治体独自の木育キャラバンセットを制作し、本イベントの開催を継続的に行いたいと切望するケースが増えつつある。その時には、当法人が監修を請け負い、制作から運用、人材育成に至るまでアドバイスする。

例えば岡山県西粟倉村では、木育キャラバンを開催した際に、村の人口を遙かに上回る来場者があったことから、このセットを地元材で制作、県内各地に巡回できないかとの提案があった。私どもとしても、ちょうどイベントの開催回数が急増していたタイミングでもあったため、第2の「木育キャラバンセット」として、西粟倉村と協働してセットを制作。その後は、県内のみならず、広く西日本を中心とした木育関連イベントへの展開を行っている。その数、年間約15回に及び、西粟倉村のPRにもなっている。

このような活動を通して、SDGsの17の目標との関連で言えば、3「すべての人の健康と福祉を」、8「働きがいも経済成長も」、11「住み続けられるまちづくりを」、12「つくる責任つかう責任」、13「気候変動に具体的な対策を」、14「海の豊かさを守ろう」、15「陸の豊かさを守ろう」、17「パートナーシップで目標を達成しよう」を実現していると考えられる。